

三作上演に内部的必然性を想定することは、さほど飛躍した考え方ではないと思える。どれほどひかえ目に見つもっても、親鸞・真仏・源海の三人の伝記浄瑠璃を加賀掾が上演したこと、それが『親鸞聖人御因縁』と同じ組合せになっていること、加賀掾にそれ以外の真宗関係浄瑠璃がないという三つの事実だけは、偶然と考えるわけにいかないのである。

つまり、加賀掾は仏光寺教団と、何らかのつながりがあったのではないかと推定されるのである。そこには、大阪において、親鸞伝浄瑠璃を上演して、東本願寺からきびしい弾圧を受けた出羽掾・播磨掾らを尻目に、京都にありながら、当時東本願寺と敵対していた仏光寺とつながって、東本願寺に対しては巧みにカムフラージュしながら、仏光寺の高僧伝を上演した加賀掾、という構図が、ぼんやりながらうかんでくるように思えるのである。

昭和五十一年度

## 特別研究生研究発表要旨

### 浄土教における罪惡観について

秦 治 人

人間に於ける罪惡の問題には様々な側面からの捉え方があるが、ここでは仏教、特に浄土教的罪惡観について考えてみたい。

仏教の基本的立場には、縁起觀や業思想があり、その宗教的实践は「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」の七仏通戒偈や、戒定慧の三学の実践として説かれていく如くである。仏教では人間の行為(業)を身口意の三業から捉え、善・不善の行為の基本になるものが十善業・十惡業(十不善業)である。なかでも貪欲・瞋恚・迷妄(癡)は三不善根、すなわち惡の根源的なものとして三毒の煩惱とも呼ばれるものである。

また惡の行為は罪業とも呼ばれ、両者は必ずしも明確に区別されないものである。いわゆる罪惡と言われる如く惡なる行為は罪とみなされるのである。

では浄土教に説かれる罪惡とはどのようなものであろうか。周知の如く『大經』の三毒・五惡段や『觀經』序分や下品には、人間業行の惡業と苦惱する様が具体的に、しかも仏の悲歎として説かれている通りである。人間罪惡業の事実と仏の悲歎こそ、多く

の浄土教祖師達の願生浄土への情熱の源であり、教説の上にひたすら同感してゆかれたところに罪惡の問題は自身の事実であつたのである。

「真実功德相は、二種の功德あり。一は有漏心より生じて法性に順ぜず、いわゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、若は因、若は果、皆これ顛倒、皆これ虚偽なり、この故に、不実功德と名く」『論註』、「貪瞋邪偽、奸詐百端にして、惡性侵め難し、事蛇蝎に同じ。三業を起すと雖も、名けて雜毒の善と爲す。また虚偽の行と名く、真実の行と名けざるなり」『散善義』、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉して、出離の縁あること無し」(同上)、或いは「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」『歎異抄』、これらの言葉に表わされている如く、浄土教の人間觀、実践とは、斷惑証理や廢惡修善の聖道門的仏道の実踐の破綻、成就し得ない機の事実のところから把えられているのである。それこそ惡を捨て、惡を斷じて菩提に至りえない末代罪濁の凡夫といわれる所以である。しかし仏世を去りて後の凡夫故であると同時に、かえって智淺く惑障処深き凡夫の本質は本來罪惡生死の凡夫として、また無始以來の自己に於いて常没流轉の煩惱成就の凡夫として一層深く信知されねばならなかったのである。

従つて人間の罪惡業とは、單に今の現在の起業に現われるものでなく、存在そのものの可能性や根底から無始以來の歴史の事実として現實化するものであり、この歴史的罪惡業の深重の内觀こそが如來自身の機の深信から廻向されるのである。煩惱成就でし

かあり得ない凡夫のうちからは眞の罪惡業の深信はあり得ない。無始以來惡業煩惱に沈める群生、眞実の機の深信もない凡夫に働くものが、如來の願心であり、本願の歴史である。一切善惡と罪障に流轉する人間業道の歴史、そしてかかる衆生を呼びかけてきた如來本願の歴史(歴史の精神)の交流が浄土教の世界である。かくして人間の善惡に於いて成ぜられる苦悩の歴史が、本願の働く場であり、この二つの歴史の対応の中に自ずから無爲自然、畢竟浄土の世界があらわされる。しかし本願と機の呼応が自然でなく、いわば自力執心の立場から罪福心に基く修諸功德として現われるとき自己矛盾としての人間があらわれる。罪惡觀の根底に罪福心(幸福を求める心)があるとき、人間は如來の願心に呼応出来ないのである。

我々は絶対無限の願心の中にあつて、かえつて罪福心に執られ、善惡を超えんとしつつ自己に執られる。本來無自性、無我の自然を知らない故に自心を以て莊嚴し、善根功德をも浄土願生の爲に廻向せんとする。それが自己矛盾であるために、不了仏智の罪とも呼ばれる。「仏智を疑惑する故に、胎生のものは智慧もなし、胎宮にかならずまゐるを、牢獄にいとたとへたり」、『疑惑和讃』、「罪福信ずる行者は、仏智の不思議をうたがひて、疑城・胎宮にとどまれば、三宝にはなれたてまつる」(同上)と示されている如く、罪惡は單に倫理的・道德的實踐の上から言われるのでなく、仏智疑惑・罪福信ずるという信心の内面的質から言われるのである。このように浄土教的罪惡とは本願力を疑ふこと、不了仏智のところに一層重くて深いのである。それ故に「仏智う

たがふ罪ふかし、この心おもひしるならば、くゆる心をむねとして、仏智の不思議をたのむべし」(同上)と深く戒められているのである。

要するに罪惡の根源には自力執心・仏智疑惑といわれるものがあり、罪惡を離れることの浄土教的方向は、自力の心をひるがえして他力の信に帰するところにある。即ち横超他力ということである。宗祖は「横超とは、本願を憶念して自力の心を離る、是を横超他力と名くるなり。斯れ即ち専中の専・頓中の頓・真中の真・乗中の一乗なり、斯れ乃ち真宗なり」(「化身土巻」)と示して善惡を他力によって超え、自力を他力の本願に帰することによって離れる以外に道がないことを教えられる。

しかし宗祖はまた、かかる自力の心を離れることの困難な体験を三願転入の自督によって表現されている。即ち二十願真門として開顯されたものが、日常的・道德的善惡の心のうちには現れない所の最も深い潜勢的な力としての自力の心、罪福信ずる心の根である。罪福信ずる自力は本願に帰しつつも、本願の嘉名を以て己が善根功德とする。即ち専修にして雑心なる姿である。それ故に「悲しい哉、垢障の凡愚、無際より已来、助・正間雜し、定散心雜はるが故に、出離其の期無し。自ら流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰し匡く、大信海に入り匡し。良に傷嗟す可し、深く悲喚す可し。凡そ大小聖人・一切善人、本願の嘉号を以て己が善根と為るが故に、信を生ずること能はず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能はず、故に報土に入ること無し」(「化身土巻」)と述べられたのである。

まことに無際よりなれ親しんできた自力の心、罪福信ずるころは離れ難く、我々の存在の根として深く把えて離さないものである。浄土教信仰の罪惡とはかくて現存在の生死の苦惱から存在の根として元初的とも言うべきところまで達する業の傷みとしてあるものである。まして「邪見・憍慢の惡衆生、信樂受持すること甚だ以て難し、難の中の難これに過ぎたるはなし」(「正信偈」)という浄土教の信心に於ける難、罪惡こそ最も重要な宗教的課題である。しかしてまた、かかる衆生の事実に呼びかけて止まないのが如来の大いなる願海である。即ち「願海とは、二乗雜善の中・下の屍骸を宿さず、何に況んや人天の虚仮・邪偽の善業・雜毒雜心の屍骸を宿さんや」(「行巻」)という本願の行信の道がどこまでも人間の罪惡業の上に呼びかける。

#### 四分律刪繁補闕行事鈔導俗化方篇の研究

——八齋戒の授受について——

大 沢 伸 雄

(1) 原始仏教以来、在家信者は「六齋日には八戒を受持する」という事を、重要な行道の一つに数えてきた。この問題につき初唐の道宣の所論を検討して、中国仏教における戒律の受容と展開の一端を管見せんとするのがこの小論の狙いである。

この「八齋戒」の受持とは、道宣も述べているが、年の一、五、九月の前半ヶ月の「三長齋月」と、毎月の八、十四、十五、二十